

発明文化論

〈第 68 回〉

丸山 亮

神 仏 習 合

梅雨の中、出羽三山の一つ、羽黒山を訪れた。山門をくぐり、身を清める祓川の流れるところの下って神橋を渡り、さらに山頂へと至る参道に行く。樹齢数百年の杉木立や深い森に包まれて、あたりには山岳信仰の場らしい神々しさがある。やがて東北で最古という国宝の五重塔が見えてくる。素木造り、柿葺きで均整がとれ、古色を帯びていて美しい。塔はインドのパゴダを起源とする仏教の象徴だから、ここは神仏習合の場でもある。明治の廃仏毀釈で山門の中にあつた仏像などが取り払われたといわれるが、五重塔が残ったことから、仏教的な雰囲気をお留めている。

山頂には出羽三山合祭殿がどっしりと建つ。月山、羽黒山、湯殿山の三神を祭り、文政元年の再建ながら、萱葺、木造建造物としては東北随一の大きさで、国指定の重要文化財となっている。合祭殿のはず向かいに建治元年の銘入りの古い大きな鐘と鐘楼があつて、ここにも神仏習合の一端がみられる。合祭殿の中から、突然ご詠歌の斉唱が聞こえてきた。参拝者が導師に導かれて歌っている。なんとなく仏教的な響きがある。

出羽三山は祖霊が鎮まる山、さらに山の神、海の神が鎮まる山などの意味合いで、広く昔から信仰されてきた。羽黒山のふもとには手向（とうげ）と呼ばれる宿坊街があり、全国各地の信者はまずここに泊まって、精進潔斎してから聖域へ足を踏み入れる。宿坊街の規模では高野山のそれに匹敵し、世界遺産の登録をという声もあったようだが、残念なことに近年建て替えが進んで、往時の面影は失われた。

ところでこの宿坊や合祭殿の境内で土産物屋を営むのは、みな山伏の修業をした人たちだという。山伏とは修行のため山野に起臥する僧のことで、修験者ともいい、山の靈力を身に着けようとする。鈴懸、結袈裟をまとい、金剛杖を突いて法螺貝を吹き鳴らす。歌舞伎の勸進帳で見る弁慶の格好だと思えばいい。この山伏がまた、古来の神信仰と密教的な仏教との習合を体現している。

仏教の伝来以前、日本はずっと自然に宿る神を信仰してきた。それが初めて仏教に接したときの驚きはどれほどであつたろうか。百済から釈迦如来像などの仏像とともに仏教がもたらされたとき、在来の信仰との調和は必ずしも容易でなかつた。当時の有力貴族たちの受け止め方も、蘇我と物部のように受容と反発の正反対を示した。国家鎮護の宗教として定着していくのには、外来の仏自体も神とみなす本地垂迹説が必要だった。仏や菩薩が人を救うために神の形を借りて現れるという経論に由来し、渡来した仏は外国人の拝む神として、在来の神と並んで受け入れられていく。やがて神社に付属した寺院である神宮寺が生まれ、神仏混淆が進む。そして時代が下ると、混淆は習合といえるまでになる。

異質な宗教が混淆していくのは、文化交流の過程でどこにでも起こりうる現象なのだろう。ヨーロッパの基底文化であるケルトは独自の宗教をもっていたが、紀元後、キリスト教化していく。今日でもキリスト教のなかに紛れたクリスマスの行事など、古代の信仰がのぞいている。また、中国ではインドから仏教が入ってくる当初、摩擦を生じながら、次第に在来の道教などと併存するようになる。日本でも同様なことが起こつたといつていい。

出羽三山の信仰はもちろん、今日なお盛んな観音霊場をめぐるお遍路なども、神仏習合の一端を表す。霊場には、湧水、巨石などの自然信仰が影を落としている。和魂洋才という言葉があるが、それに先立っては和魂漢才があり、今日なお日本人の行動に影響を及ぼしている和魂仏才にも、目を向けておくべきであろう。

（まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士）